

ホトトギス

昭和十四年三月二十八日印刷  
昭和十四年七月一日発行  
（第百二十五巻）第七号

# ホトトギス

七月号



## 風雅の小筥（五十四）

廣太郎

昭和四十年十一月十五日に丸ビル七五三区にホトトギス社が事務所を構え、昭和五十七年四月一日に私が就職した事は先月までに書いたが、この部屋が私の丸ビルでの最長勤務となるのである。昭和六十三年に編集長を拜命して、その後忘れもしない出来事の一つとして、昭和六十四年一月七日の出来事である。もう皆様御存知の通り昭和天皇が崩御あそばされた日である。その日は土曜日であったが、ホトトギス社は当然休みではなく、朝家で会社に行く支度をしていると、テレビのニュースは、御危篤から崩御と、慌ただしく報道していたのを思い出す。ずっとテレビを観ていたかったが、そそくさと電車に乗って丸ビルに向かった。その日は、どんな事情かは失念したが、午後からは芦屋の生家に行く予定があり、その頃はホトトギス社が土曜半ドンになっていたのか、それも忘れてしまったが、とにかく午前中のみの勤務であった。これも思い出すと、丸ビル一階には会社と取引している銀行の支店があり、当時土曜日も営業しておりその窓口で事務的な仕事があったのも思い出す。そして、何時もは笑顔で応対する窓口の係の女性が、にこりともせずに対応していた。丸ビルの上空には何時の間にか爆音が轟いており、窓を開けて空を見ると、それこそ例えは悪いが、戦争でも起こったのではないかと思える程ヘリコプターが編隊を組むように静止している。午後新幹線に乗ると、社内アナウンスが先ず「天皇陛下におかれましては……」とお悔やみから始まっていたのも懐かしい思い出である。

# 廣太郎句帳 廣太郎

令和三年七月一日 蕉心会

梅雨 滂沱 犯 罪者めく 雨男  
五月雨やここまで天に嫌はれて  
青鷺の三羽黒雲引き寄せて  
黒南風に漣 尖りゆく池面  
五月雨に鳥語乱れてをりにけり  
スコールに色失へる都心かな  
梅雨の蝶雨に高さを奪はれて  
七変化雨に仕上がる終の色

七月四日 青嵐会音屋例会

男三瓶の靈氣に揺るる沙羅の花  
喜雨の底修羅場となつてゆく仔細  
喜雨の音閉ざされてゆく母の耳  
鈍色も山の賑はひ沙羅落花  
七月六日 カトリック新聞選者吟

喜雨 来る 花 鳥 風 月 蘇り

七月七日 NHK文化センター

花あやめ孤高の色を雨に解く  
万緑に鳥語雨音吸ひ取られ  
軸替へるより夏座敷出来上る

七月八日 土筆会

ジャスミンの香に躓いてゐる別れ  
造り滝江戸の盛衰秘めて落つ  
ナイターの灯に吸はれゆく大ファウル  
糠床をはみ出してゐる胡瓜かな

七月十四日 北國文芸選者吟

青田風植系たる子等の未来へと

七月十五日 登高会

冷奴口に広がる里の景  
雲の峰峙れへ急ぐ鳴かな  
冷奴崩れ火釋 浮ぶ血  
タワいの灯突き刺さりたる雲の峰  
七月十六日 廣邦会

滴りや大河へ刻む一頁  
一通の暑中見舞に知る恙

七月十八日 石見ホトトギス大会

梅雨明の富士伯耆富士繋ぐ旅

啄木鳥に目覚めゆきたる森の精

句碑の文字涼風なぞりゆく除幕

七月二十四、二十五日 野分会夏行

鉄路行く八百キロの旅涼し  
三瓶野を揺さぶつてゐる時鳥  
一杯のビールに募る旅心  
歎声の遠退く都心夜の秋  
百日紅揺れ蒼天に色放つ  
三瓶野の星と語らふ夜の秋  
静かなる五輪涼しく開幕す  
雲の峰輪郭崩れゆく刹那  
音纏ひ風鈴売は路地に消ゆ  
片陰に咲く一輪の孤高かな  
輪島塗箸に仕上る夏料理  
風鈴に矛を納める夫婦かな  
木下闇首都の喧騒閉ぢ込めて

鬼百合に都心の靈気集まり来  
母いよよ頑固になりて夜の秋

七月二十五日 青嵐会東京例会選者吟

二年振り出会ふ三瓶の露涼し  
時鳥三瓶の日暮誘へる  
夕焼の極彩色といふ三瓶  
黄菅野のライトアップといふ虚飾  
月涼し雲間に星を従へて

七月二十五日 悼 佳田翡翠様

夫婦星となりて誹諧守られよ

七月二十七日 若水句会選者吟

海紅豆兵士の眠る丘を向き

ヨット行く太平洋を狭めつつ

寝冷して耳元騒く天使かな

七月二十八日 目黒学園句会

雲払ひつつ払ひつつ月涼し  
レコードの針飛ぶ音や夜の秋  
射干の一片欠ける夕間暮れ  
夜の秋 鶯張りの音乾き  
射干の斑点一つ飛び立ちぬ  
アンジェラス音くぐもりて夜の秋

七月三十日 不動の庭で遊ぶ会

蝉時雨一山包み込む刹那  
参道の猫に逃げられ蚊に追はれ  
補聴器を占領したる蚊の羽音  
遠雷に戸惑うてゐる歩幅かな  
艦隊のやうに水尾引く鯉涼し  
鰻食ふより句心の湧き出づる

# 雑詠 廣太郎 選

銀の箱に収まり雛の客 大阪 酒井湧水  
 天といふ自由ドライブのどけしや 同  
 師のをらぬ庭ミモザ咲くミモザさく 同  
 凍返る言葉入つてこぬ訃音 香川 湯川 雅  
 春陰の隅に打ちひしがれてをり 同  
 不確かを確かと響きぬ春の星 同  
 別室に雛飾りある逮夜かな 東京 田丸千種  
 主なき雛となりぬ灯を入るる 同  
 百年のともし火染むる雛かな 同  
 早春の園はむさし野江戸の松 長岡 安原 葉  
 北国もやうやく現れし春田かな 同  
 石鹼玉吹くベランダの一人つ子 同  
 梅ヶ香にかなたの月日いとほしむ 神戸 和田華凜  
 地震のこと忘るるまじと梅真白 同  
 潤みゐてひときは美しき春の星 同  
 芦屋より鶴舞ひ昇る神の国 東京 河野昭彦  
 神の国鶴舞ひ来るを祝ひをり 同  
 鶴一羽功成し遂げて天に帰す 同

白梅の香り遣りしその辺り 同 今井千鶴子  
 散りてなほ香り漂ふ梅白き 同  
 みよし野や共に仰ぎしかの桜 同  
 盆梅の幹の太さが語る秘話 西宮 本郷桂子  
 梅が香の風黒潮の日をたたむ 同  
 白魚の白の際立つ蒔絵椀 同  
 百尺竿頭更に一步をホ句始 相模原 木村享史  
 自らの手綱をしかと老の春 同  
 老の春寡黙は虚子に倣ひてや 同  
 ともに泣き一人また泣き冴返る 龍ヶ崎 今橋真理子  
 あたたかや師の恩寵の如くにも 同  
 木の芽吹く悲しみを力に変へん 同  
 春立つや海を見たくて降りる駅 神戸 玉手のり子  
 比良白く公魚釣りのヤツケ赤 同  
 白魚の跳ねて哀しき水零す 同  
 大いなるものに呼ばれて鳥帰る 西宮 海輪久子  
 如月や人に光陰とどまらず 同  
 慕ふ歩に悼む歩に初桜かな 同  
 風折れの小枝に蓄春浅し 神戸 山田佳乃  
 篠笛や平家の宮の針供養 同  
 薄水や猫の瞳の透き通る 同  
 早春の貝殻はまだ濡れてをり 同  
 絵硝子のマリアに祈る春の雨 同  
 これからのことを話さう梅三分 同 藤井啓子

## 雑詠句評（六月号より）

### 寒日和日差し米粒ほど延びし 神戸 田中由子

良き日和ながらまだ寒の内。日差しが延びた感じではあるが、それもほんの米粒ほどと思える。

寒の厳しさ故に、春が来るのが待たれるという心の現れであり、米粒ほどの日差しすら、ちょっと嬉しいと思える作者なのである。  
（雅）

一年の内で冬至が一番日が短く、その後段々日が伸びてきて、寒の内も少しずつ伸びているのである。それでも冬の日差しは何か遅々として感じるのも実感であろう。そんな心持ちを米粒に例えて、寒日和を見事に言い当てている。（廣太郎）

### 冬紅葉雨の絵筆を加へけり 渋川 木暮陶句郎

雨に濡れた紅葉の美しさを、簡潔に、そして躍動感ある調べで一気に表現された腕前は見事。「冬紅葉」だけに「あわれ」があり、そこに作者の「年輪」といったものがうかがえる。（公次）

最近秋に余り紅葉は濃く彩る事は少なく、東京都心等は十一

月の立冬を過ぎてから色付く事が多い。紅葉の俳句を詠むのも実景としてはどうしても冬紅葉になってしまいが、冷たい雨を絵筆と表現した事が見事である。（廣太郎）

### 逝くよりも逝かるる辛さ寒椿 大阪 酒井湧水

亡くなる方の、肉体的精神的な生前の苦しみは想像もできないものだろう。しかし、残された者の辛さも決して小さくはない。その思い出が深ければ深いほど、悲しみも深く大きい。まだ寒い寒椿の頃の別れである。（龍雄）

人間は生れてから成長し、色々な人との縁があり、そして最後にはこの世を去るのである。人生の最後を迎える時、その縁あつた人が遺された時は、やはり悲しみも一人であろう。聖職者ならではの情が季節を通して伝わってくる。（廣太郎）

### 猿曳に笑ひ転げてふと哀し 神戸 和田華凜

「猿曳」は新年の季題。正月に猿を曳いて家々を巡り、厄除けの祈禱を行った。今ではその風習も殆ど廃れてしまった。おそらく作者は大道芸としての猿曳を見物したのであろう。猿と人間の一体の芸に、最初は笑い転げていたが、ふと猿が哀れに思えたのだ。野生の猿にここまでの芸を教え込むのは並大抵のことではないであろう。「おもしろうてやがて悲しき鵜舟かな」芭蕉の句を思い出した。（しぐれ）

筆者はよく東京都港区芝公園にある増上寺の境内で行われてい

る猿曳を見たが、流石によく馴らされた猿はユーモア溢れる見事な芸を披露して、観客を笑わせているが、それにふと哀しみを覚えた作者の優しさが感じられる。(廣太郎)

### 星遠くして冬の灯の大都会 袋井 湖東紀子

天と地の対比とバランスが素晴らしい。冬の夜空には星々が煌めき、そして地上の楽園大都会には冬の灯が輝いている。都会を彩るビル街の灯や、繁華街のネオンなどなのであろう。

冬の星は特に鮮やかであり、いつまで観ていても飽きることはない。オリオン座などは寒さの中にも心を和ませてくれる。

夜空に浮かぶ星という静なるものと、都会の喧騒との対比もまた面白い。遠景の静と眼の前の動を詠み切った見事な佳句である。

(紀二)

冬はどこか淋しい響きもあるが、十二月になると、クリスマスや年末や正月の賑わいで、特に大都会はそれこそ不夜城と化する。夜になっても星をあまり見る事は出来ない。現代の生活を風刺しているようである。(廣太郎)

### 人の輪を飛上らせてとんど爆す 香川 湯川 雅

勢いよく燃え上がってゆくととんどを真ん中に囲む人々の輪。燃え上がるととんどのなんの前触れも無く何度も竹の爆ぜる大きな音。竹が爆ぜる一瞬ごとに驚いて躍り上がる人々を大掴みして「人

の輪」と捉えたところにこの句の面白さが生まれている。まるで鳥轍しているかのように捉えた一句は、蕊を中心に散ってゆくまで何度も開いては閉じる花のようでもある。

視覚と聴覚を通した的確に写生した一句である。(しげ人)

筆者の通学していた小学校では毎年一月十六日に学校のグラウンドでとんどをしていた事は山会の写生文で書いたが、大きな櫓が燃え盛るのは迫力があるそれが爆ぜる瞬間をダイナミックに表現している。(廣太郎)

### 今生に会ひたきものに雪女 熊本 岩岡中正

「雪女」は雪国の幻想的な世界を感じさせる想像上の季節なので、思い切り飛躍して詠めるもの一つだろう。作者は九州に住まいなので、なかなか雪女、そして雪女の出そうな大雪に出会うことがなかったのだろうか。怖いものみたさかもしれないが、掲句を読むと、雪女は詩心を昂らせてくれるようなミュージックのような存在のようにも感じられる。(佳乃)

幻想的な季節である雪女であるが、存在についてはそれぞれの方々で考え方があろう。ちなみに筆者は何度か会った事があると言えば色々御意見があろうが、何かこの世の営みを考えるのとロマン溢れる句である。(廣太郎)